

『就実論叢』第47号 抜刷

就実大学・就実短期大学 2018年2月28日 発行

初等家庭科教育法における模擬授業での 相互評価からみた授業実践力についてⅡ

－ 模擬授業を二度実践した場合 －

**Practical teaching ability of primary teacher trainers by reading peer evaluation of
trial lesson practice in Home Economics Ⅱ :
Effects in the case of twice trial lesson practice**

哇 五 月

初等家庭科教育法における模擬授業での 相互評価からみた授業実践力についてⅡ

－ 模擬授業を二度実践した場合 －

Practical teaching ability of primary teacher trainers by reading peer
evaluation of trial lesson practice in Home Economics Ⅱ :
Effects in the case of twice trial lesson practice

畦 五 月 (生活実践科学科)

UNE Satsuki

キーワード：家庭科教育法、模擬授業、相互評価、授業実践力

本文要約

初等家庭科教育法においての一度の模擬授業では授業実践力形成が十分でなかったため、前報（畦，2017）で二度の授業の必要性を指摘した。この指摘をもとに本年度は二度の模擬授業を実施し、調査により授業実践力形成の実態把握を試みた。その結果、①家庭科教育法に意欲的に取り組み、「家庭科」に対する見方が変化した。②模擬授業前の学習指導案の添削回数（一度）を不十分と認識した対象がいた。③模擬授業の班活動での参加度において公平性の担保が十分でないと認識した対象がいた。④学習指導案作成時、特に授業構成員に関する項目に対象が困難を感じていた。⑤模擬授業後に実施した児童側評価と指導者側評価の評点に乖離が認められた。⑥二度の授業でも指導者側評価による総合評点が上昇しない班が半数存在した。⑦対象が授業の評価能力を獲得できていないと考えられる側面が授業評価表の指導者側評価との乖離から確認された。今後の課題として、授業実践力向上を目指した授業実践には論点の絞り込みによる協議や、指導者の模擬授業前の積極的な介入などさらなる検証が必要であると考えられた。

キーワード：家庭科教育法、模擬授業、相互評価、授業実践力

1. はじめに

2006年の中央教育審議会答申のいわゆる教員養成の制度改革（「今後の教員養成・免許制度の在り方について」）では、実践的指導力の育成が重要課題とされた。この答申を受けて教員養成の教科科目において実践的指導力を教員の資質能力として育成することが求められ

た。この答申を受けて近年家庭科の教員養成課程においても、授業実践力の育成を図るため家庭科教育法で模擬授業を実施した場合の教育効果に関する先行研究がされている。たとえば、模擬授業導入の有効性（堀内，2008）、授業力の向上（貴志，2010）、教育実践力育成の可能性（青木，2013）、模擬授業ヘレフレクションを導入した場合の効果（宮里ら，2015）などがその一例として挙げられる。

著者は現在の教育課題を初等家庭科教育法で解決する試みの一貫として、学生同士が学び合う体験である模擬授業を数年前から導入し、その教育効果について検討している。この学びの中で、幅広い知識内容の修得のみならず授業実践力の基礎を育成することも目標としている。つまりこの学修過程で「どのように児童を学ばせるのか」という教師としての技量育成も大きな目的としている。前報（畦，2017）では、講義に模擬授業を導入した場合、その児童側の授業評価の高群と低群間に授業構成力、教授スキル、教師としての言動・雰囲気順に回答の語彙数で有意に差が認められた。しかし、省察の討議が十分でなく、模擬授業も一度のみであったため、再度の模擬授業の実践が授業実践力の向上には必要ではないかと考えた。そこで本報では、二度の模擬授業を実践した場合の有効性を学生及び指導者の相互評価による授業実践力の量的把握から検証することを目的とした。

2. 調査方法

(1) 調査対象と講義の流れ

調査対象は、岡山県内 A 大学教育学部在籍の 2 年生及び、3 年生混合の 47 名である。加えて「家庭科教育法（初等）」（以下、教育法と略記）の表 1 に示すカリキュラムを受講した者である。講義では、家庭科教育の特徴、授業計画などの講義を経て、学習指導案（以下、指導案と略記）の作成を全員同一小単元で一度行った。この作業は個人で行い、教育法の指導者（以下、指導者と略記）が添削後返却し、指導案の組み立て方、内容構成などを解説した。

表 1 初等家庭科教育法のシラバス内容

時間	講義内容
1	家庭科の独自性と特徴
2	小学校家庭科の教育課程とその内容
3	学習指導要領の内容解説「家庭生活、食物分野」
4	学習指導要領の内容解説「衣服、住居分野」
5	学習指導要領の内容解説「消費生活、環境分野」
6	学習指導案の作成方法と作成
7	学習指導案の修正・解説
8	家庭科の評価方法と今後の課題
9	模擬授業①②
10	模擬授業③④
11	模擬授業⑤⑥
12	模擬授業⑦・模擬授業の準備
13	模擬授業③④
14	模擬授業⑤⑥
15	模擬授業⑦・模擬授業評価とまとめ

講義後半の班単位（各班 6～7 人構成）の模擬授業（以下、授業と略記）は、期間を 2 期に分けて各班二度行った。その際、各班は指定された大単元（全班に単元の一時間目を指定した）について全体の授業計画を立てると同時に、本時案を作成し、一時間分のうちの一部（25分）を班員が交代で 3～4 分ずつ教師役となり授業を行った。授業開始前には授業の単元構成や、学習指導要領解説家庭編（文部科学省，2008）（以下、指導要領家庭と略記）の

該当する内容が記述された箇所を説明した。同時に指導案を全員に配布した。授業終了後に残りの授業時間（20分）の指導内容を説明し、その後全体で15分程度の省察の時間を設けた。その時児童役の子（以下、児童役と略記）から「よかったと思う点」「工夫したら良いと思う点」の発言を求めた。指導者は以下述べる課題に支障がない程度で、指導要領家庭の指導内容に即した内容構成であったかのコメントを述べる程度にした。

(2) 課題としての模擬授業評価表とその内容

児童役の子の課題として、各々の授業につき以下の模擬授業評価表（以下、評価表と略記）の提出を求めた（児童側評価）。評価表は、記述式評価と五段階評価の二形式から成る。つまり記述式評価表では、①授業の流れである導入、展開、まとめ ②授業の仕方（問ひかけ、話し方、板書の仕方など）③他の気づいた点（改善点、良い点）の3点を記すように構成されている。一方、五段階評価表は以下詳細に述べる「授業スキル（4項目）」と「目標達成（6項目）」の計10項目で構成されている。①学習のめあてはきちんと示されたか ②導入は設定されており、その授業への入り方は、本時目的に一致していたか ③子どもへの対応は良かったか ④子どもへの活動の取り組みはできていたか ⑤教具の準備はできていたか ⑥板書は計画的にできていたか ⑦展開は本時目標とあった方法であったか ⑧まとめは本時目標と一致していたか ⑨学習評価も本時目標に照らした評価が行われていたか ⑩全体をみて、授業の進め方はうまくいっていたか。

この評価表は指導者には記名状態で提出させたが、実施班への回覧時には個人が特定できない状態としている。この評価表により、児童役は他班の授業を客観的に見取る能力を獲得することを、また実施班は省察の機会を得ることを目的とした。この評価表を用いて指導者も五段階評価を記入し、同様に実施班へ回覧した。

二回目授業も一回目と同一単元で実施したが、一回目に指導要領家庭の内容に準拠していない指導内容が見受けられた点を踏まえ、指導要領家庭を熟読し、その内容を踏まえた授業構成を行うように、さらに単元によっては、5年生と6年生の2学年にわたって継続的に指導するように求められている内容があるため、指導内容を考える際は2年間の継続性・連続性を考慮するよう指導した。二回目の授業終了後、児童役には一回目と同一の10項目の五段階評価及び、一回目と異なる記述式評価（①この授業で最も良い点とその理由 ②この授業で最も改善した方が良い点とその理由）を課題として求めた。

(3) 家庭科教育法の講義に関する調査

15回の講義終了時に、以下述べる無記名式の調査を実施した。

1) 調査内容

本調査の調査内容は、教育法講義や模擬授業後の変容などに関する以下の7項目である。

①本講義に意欲的に取り組んだか（以下、「意欲的取り組み」と略記）。②家庭科教育法に興味・関心がわいたか（以下、「家庭科教育法への興味・関心」と略記）。③模擬授業後、児童役及び、指導者による記述式及び点数式の模擬授業評価表を返却したが、その評価表から自分たちの改善点を知ることができたか（以下、「模擬授業評価表の役立ち」と略記）。④模擬授業前に指導案を提出し添削を一度行った。添削は、模擬授業を進めるにあたって役に立ったか（以下、「指導案の添削の役立ち」と略記）。⑤その添削は一度であったが、一度の添削で良かったか（以下、「指導案の添削は一度で良いか」と略記）。⑥家庭科の教科に対する見方は、この教育法を受講して変化したか（以下、「家庭科への見方の変化」と略記）。⑦変化と回答した人には家庭科に対する見方がどのように変化したのかの記述回答を求めた。⑧家庭科教育法の授業満足度はどれ位か（以下、教育法の授業の満足度）。⑨模擬授業を班活動で実施するにあたり、仕事の公平性は保たれたか（以下、模擬授業の公平性と略記）。⑩模擬授業実施で改善した方が良い点の10問である。⑦と⑩は自由記述とし、これ以外は四段階評価とした。

この調査項目に加えて、模擬授業を実施するにあたり困難と考えた項目（全20項目）を5項目を上限にチェックしてもらった。

2) 倫理的配慮

学生には調査実施の趣旨を口頭と文書双方で説明した。同時にあくまで研究のためのデータ活用であるため、個人情報倫理基準に基づき処理し、それ以外の利用はないことを説明し、文書への署名により許可を得、許可を得た者のみ調査を行った。さらにそれらの書類提出の有無や結果は成績に影響しないことも同様の方法で伝達した。

(4) 分析方法

集計及び分析は、エクセル統計2013を使用して行い、単純集計、質問項目間はクロス集計後独立性の検定を行った。

3. 結果及び考察

(1) 家庭科教育法の講義に対する評価

対象の講義評価である8項目の評点を表2と表3に示した。昨年度（畦，2017）と共通質問項目である①②③④⑥は、ほぼ類似した評点傾向を示した。そのうち③は前年度より0.2ポイント上昇し、本年度がより「評価表が役立った」と回答した。本年度から二度授業を実施したため、他者評価を指導内容の再構成の参考や、自己評価での認識の誤りを是正する手段としたためと推察する。

さらに評点内容を詳細に検討すると、⑤を除外した7つの質問事項に8割以上が「とてもあてはまる」「まずまずあてはまる」と回答し、平均評点は3.0以上であった。その一方で⑤は2.6を示し、44%が「全く」、あるいは「あまり当てはまらない」とした。本年度は模擬授

業回数増加で講義内での指導案作成の時間が前年度より削減されたため、指導者による添削も一度であった。そのため一度の指導案添削を不十分と感じた対象が多かったと思われる。後述する授業構成力の育成のためにも、一度でない指導案添削が必要と考えられる。さらに⑧も20%が低評価を示し、班活動主体の授業前後の参加度合に不公平感を認識した者が少なからずいたことを示す。

表2 家庭科教育法に関する質問事項に対する人数割合

					平均点数	昨年度点数 (2016年度)
	全く あてはまら ない	あまり あてはまら ない	まずまず あてはまる	とても あてはまる		
①意欲的取り組み	0	2	25	18	3.36	3.45
②教育法への興味・関心	0	4	27	14	3.22	3.18
③模擬授業評価表の役立ち	0	1	18	26	3.56	3.35
④指導案の添削の役立ち	0	7	22	16	3.20	3.28
⑤指導案の添削は一度でよいか	3	17	22	3	2.56	—
⑥家庭科への見方の変化	0	5	24	16	3.24	3.35
⑦教育法の授業の満足度	0	3	32	10	3.16	—
⑧模擬授業の公平性	1	8	25	11	3.02	—

表3 家庭科教育法の講義評価と各因子との関連性

	① 意欲的 取り組み	② 教育法 への興 味・関 心	③ 模擬 授業 評価 表の 役立 ち	④ 指導 案の 添削 の役 立ち	⑤ 指導 案の 添削 は一 度で よい か	⑥ 家庭 科へ の見 方の 変化	⑦ 教育 法の 授業 の満 足度	⑧ 模擬 授業 の公 平性
①意欲的取り組み								
②教育法への興味・関心	**							
③模擬授業評価表の役立ち								
④指導案の添削の役立ち	**							
⑤指導案の添削は一度でよいか								
⑥家庭科への見方の変化	**	**						
⑦教育法の授業の満足度								
⑧模擬授業の公平性	**							

** : $p < 0.01$

表4. 「家庭科」への見方の変化（記述は原文のまま）

分類	具体的な記述	件数	割合 (%)
①家庭科の特徴 (他の教科との相違)	教科書通りに進める教科と考えていたが、 <u>児童に能動的に取り組んでもらうのが難しい</u> 。 <u>児童が気付けるように導く授業づくりも深く考えなければならず、複雑な授業</u> と思うようになった。	1	54.3
	副教科であるから深くは考えなくていいと思っていたが、 <u>主要教科以上に注意点は配慮が必要で大変だ</u> と思った。	1	
	難しい（教えることが簡単、奥深く教えること、楽しくて楽のイメージの逆）。	11	
	奥が深い（簡単と安易に考えていた）。	4	
	たくさん教えることがある。	1	
	（学習内容が）衣食住に限らないということ。	1	
②教材研究	児童にとって <u>楽しい授業</u> するには教師の準備が <u>不可欠</u> ということ。	1	8.6
	とても複雑で <u>授業を組み立てるのが難しい</u> と思うように変化した。（変化）	1	
	家庭科の授業づくりの大変さ。	1	
③家庭科の教材観 及び内容	児童にとって <u>自律（自立？）</u> していくための大切な教科という見方に変化した。（変化）	1	25.7
	家庭科は <u>実践的な学習が大切</u> なのだより一層感じた。	1	
	授業の進め方や持っていくかた。	1	
	意外に難しい教科。教えるには <u>意外にもいろいろなことを考えなければならぬ</u> と知った。（気づき）	1	
	小学校の頃、授業をうけて内容の薄い教科と感じていたが、学習を通して家庭科は <u>生きていくうえで最も重要な物を学ぶ教科</u> だと知った。（気づき）	1	
	授業を受ける側の時は、何気なくうけていたけど、指導者としては身に付けさせたいことがあること。	1	
	何を身に付けさせたいかを <u>しっかり考え、日常生活に生かせるようにする必要がある</u> 。	1	
授業内容がとても細かいと思った。	1		
④その他	家庭での自分の仕事や生活に関する <u>ことを教えることが中心</u> で、その内容故に子どもが <u>退屈しないよう配慮しない</u> といけなないと気づいた。（気づき）	1	11.4
	家庭についての教育の難しさ。	1	
	教えられる側から教える側に回り、 <u>どのように進めたら子供たちが理解しやすいか、子どもたち目線で考えるようになった</u> 。	1	
	家庭科を通して <u>気づかせたいことが多い</u> と分かった。	1	
	先輩から家庭科は難しいと聞いていた。自分を成長させるためには <u>大事なこと</u> だと思った。	1	
		35	100.0

下線は重要回答内容に記した。

しかしながら、対象の9割以上が「意欲的」に、「興味・関心を持ち」教育法の講義に取り組み、「家庭科に対する見方」が変化すると回答した。「意欲的に取り組んだ」者は、「教育法への興味・関心があり」($p < 0.01$)、また「家庭科に対する見方が変化した」者であつ

た ($p < 0.01$)。さらに「教育法への興味・関心がある」者は、「家庭科に対する見方も変化」した者であった ($p < 0.01$)。これらの結果は前報とほぼ一致した (畦, 2017)。本年度初めて質問項目に導入した「模擬授業の公平性」と「意欲的取り組み」も有意に関連した ($p < 0.01$)。意欲的に取り組んだ者の方が、公平性が高いと評価している結果となった。

次に、「家庭科 (という教科) への見方の変化」の回答を①「他の教科との相違」②「教材研究」③「家庭科の内容」④「その他」に前年度は四分類とした (畦, 2017)。しかし、本年度は記述内容に深みがある回答がみられたことから、前年度の分類を踏襲しながら、①家庭科の特徴 (他の教科との相違) ②教材研究 ③家庭科の教材観及び内容 ④その他とした。その結果 (表4)、①が最多回答の54.3%を占めた。中でも「教えることが簡単と考えていたが難しい」「奥が深い教科」が前年度通り最多であった。さらにその理由を、「児童に能動的に取り組んでもらう」「児童が気づけるように導く」ためと述べ、児童活動を中心に授業が展開するように考えた形跡が見受けられた。この記述は同時に、家庭科の教材観でもあり、家庭科の学問の奥深さに触れている回答ともいえる。次に多い③では、「教える以外にもいろいろなことを考える」「生きていくうえで最も重要な物を学ぶ教科」「子どもが退屈しないように配慮する」などであった。これら回答は、家庭科の教材内容に対する気付きや、家庭科の独自の教材観 (「自立していくための大切な教科」「(学習内容を) 生活に生かせる (還元する) ようにする」など) に触れた内容でもある。

さらに④その他では、「家庭」という場を教材とするので、個人に配慮する必要がある (小学校学習指導要領 解説家庭編 (2008) 3章4「家庭の連携」「家庭生活は個々の家庭によって異なることから、児童を取り巻く環境に十分配慮して学習をすすめるように」に該当)。つまりプライバシーに配慮する必要のある教材があるが故に、その教材の取り扱いの難しさにも触れた回答もみられた。

以上をまとめると「家庭科への見方の変化」では、教育法の講義を通してリテラシーだけではない「生きるため生活する」「自立的に生きる」(学習指導要領家庭)の目的を掲げた家庭科の独自性に気づいていった過程が読み取れる。

(2) 指導案を作成するにあたり困難と思った点

前報 (畦, 2017) で授業実践にて困難と思った点を調査し、その記述内容を大別した結果、①指導案作成と②授業実践と報告した。従前の報告 (藤沢, 1995) にも、教育実習生の悩みの一つには指導案作成がうまくできないとの報告もある。そこで本報では、授業実践時の困難点を指導案作成時のみに限定し困難点を明確化する試みを行った。

その結果 (表5)、1位は「どこまで児童に教えて、どこまで児童に考えさせるか」2位「授業の流れ」3位「授業計画 (単元毎の時間の割り振り)」4位「一時間中の時間配分」5位「学習指導要領をどのように活用するのか」の「授業構成力」に関する項目が合計で45.3%を占め、指導案の作成自体に困難を感じたことが見て取れる。つまり授業イメージの具体的な構築が、指導案作成時には困難であった点が読み取れた。

表5 困難と思った学習指導案作成時の項目

	人数	割合 (%)	順位
授業計画（時間の単元の割り振り）	15	7.4	3
本時目標の設定	6	3.0	
めあての設定	12	5.9	
本時目標とまとめが統一しているかどうか	11	5.4	
めあてと授業内容が統一しているかどうか	5	2.5	
授業の流れ	21	10.3	2
発問の内容やその時期	14	6.9	
どこまで児童に教えて、どこまで児童に考えさせるか	29	14.3	1
まとめをどうするのか	7	3.4	
児童の活動はどのようにさせるか	9	4.4	
児童に何を考えさせるのか	11	5.4	
1時間の中の時間配分	14	6.9	4
授業方法をどのようにするのか（個人活動かグループ活動かも含めて）	4	2.0	
評価基準をどうしたらよいか	5	2.5	
学習指導要領をどのように活用するのか	13	6.4	5
ワークシートの作り方	3	1.5	
板書計画の立て方	2	1.0	
そもそも学習内容をどのようにしたらよいか思い浮かばない	11	5.4	
児童の興味関心の内容がわからない	2	1.0	
教師の留意点は指導案でどのように書くのか	6	3.0	
その他 具体的に（	3	1.5	
	203	100.0	

列挙された項目を最高5つまで選択して、その上位5位に順位をつけてもらった。

逆に、本時目標やめあての設定に関する回答数は比較的低かった。本時目標やめあての設定に時間を割く過程において上述の1から5位の項目は同時に考察していくことが一般的である。それ故この結果は、対象が授業実施に気をとられ、本来は重要な準備作業である指導要領家庭を使用しての本時目標やめあての設定、指導内容や授業方法などの授業構成に関わる検討などを十分に行っていなかったことを示唆している。つまり、声の大きさや児童対応などの授業手法に先に目が向き、さらに次の段階で重要となる授業構成や教材研究まで十分な検討ができてない実態が随所に見受けられた。

(3) 模擬授業の指導内容と学習指導要領解説家庭編の指導内容との比較検討

表6に、単元のめあて、指導要領家庭から抜粋した単元の事項及びその内容、授業での単元目標及び、その指導内容、その総合評価（⑩：児童側評価と指導者側評価）を示した。さらに指導要領家庭で求める学習内容とは異なった指導内容に下線を引いた。

特に一回目の指導内容欄で下線が目立ち、指導要領で求められている指導内容と乖離した授業であった点が見て取れる。その下線の内訳は指導内容から以下の四つに分類できた。①設定時間での指導内容ではなく、次時の指導内容であった。②複数時間の指導内容を一時間

表6-1 模擬授業の指導内容と学習指導要領が指示している指導内容との齟齬

配当学年	開隆堂教科書 ¹⁾ による 単元事項 (学習指導要領から抜粋) 該当内容に下線	単元名	学習のめあて	一回目 模擬授業の指導内容 (指導要領の内容と異なる箇所を下線)		二回目 模擬授業の指導内容		評価 (無色:児童側評価 有色:指導者側評価)	
				学習指導要領家庭編より(抜粋)	一回目 模擬授業の指導内容 (指導要領の内容と異なる箇所を下線)	二回目 模擬授業の指導内容	1回目	2回目	
5年	1. わたしと家庭生活 1日の生活をふり返り、自分ができようになりたことを見つけてみよう。	単元事項 (学習指導要領から抜粋) 該当内容に下線	学習のめあて	開隆堂教科書 ¹⁾ による 単元事項 (学習指導要領から抜粋) 該当内容に下線	一回目 模擬授業の指導内容 (指導要領の内容と異なる箇所を下線)	二回目 模擬授業の指導内容	1回目	2回目	
				<p>・1日の生活をふり返り、自分ができようになりたことを見つけてみよう。</p> <p>A①自分の成長について、次の事項を指導する。 ア 自分の成長を自覚することを通して、家庭生活と家族の大切さについて気付くこと。</p>	<p>・日曜日の家族の生活について、小学入学時の気持ちを思い出させる。 ・小学生になつて「できるよつになつたこと」「やつてもらったこと」を色遣いの付せんに書き黒板に張る。 ・この付せんの内容をもち、成長した自分と生活は家族に支えられていることに気付かせらる。 ・これからの学習で「できるよつになつたこと」を考えさせる。 ・2年間で家庭科で学習する内容を知らせる。</p>	4.1	1.0	4.0	4.0
				<p>・家庭の仕事を手伝う。 ・学んだことを生かして、家族に協力して、続けて実践しよう。</p> <p>A②家庭生活と仕事について、次の事項を指導する。 ア 家庭には自分や家族の生活を支える仕事があることが分かり、自分の分擔する仕事ができること。</p>	<p>・家族には生活の中でそれぞれ役割があること、役割があることに気付かせ、1つもしていないことと「最近するよつになつたこと」を分類させる。 ・これから実行する仕事について決める時に、決める時に考える観点を示し、仕事を決めさせる。 ・その仕事について、手順・方法を考えさせる。 ・考えた仕事の内容を発表させる。</p>	4.0	4.0	4.2	4.0
7. 食べて元気に ①わが食べの体の中の働きを理解しよう。	<p>B①食事の役割を知り、且彼の食事の大切さに気付くこと。</p> <p>・なぜ食べの食に か考え、食品に含まれる栄養素の体内での働きの理解しよう。</p>	<p>・人が生活する上で大切なものを考えさせる。 ・A君とB君の生活を比較し、良くなつた理由を考えたこと、この生活を続けるか、どうしたらよくなるか、食事はなぜ大切か考えさせる。</p>	4.2	3.0	3.8	3.0			
8. 上手に使うお金とお金 ①わたしたちの生活とお金を	<p>D①物や金銭の使い方や買物について、次の事項を指導する。 ア 物や金銭の大切さに気付き、計画的な使い方を考えること。</p>	<p>・物や金銭の使い方や買物について、次の事項を指導する。 ア 物や金銭の大切さに気付き、計画的な使い方を考えること。</p>	<p>・どんなものにお金を使っているか、収入と支出にどのようなものがあるか知り、収入は働くことで入る、限りのあること、広告を見て、買いたい品物や金額を考慮し選択すること、スポーツ選手と芸人の例から、収入と支出を比較する。</p>	4.1	2.0	4.2	3.0		

表6-2 模擬授業の指導内容と学習指導要領が指示している指導内容との相違

配当学年	単元名	学習のめあて	開隆堂教科書 ¹⁾ による 単元事項 (学習指導要領から抜粋) 該当内容に下線	学習指導要領解説家庭編よ り(抜粋) 学習指導要領の内容と 異なる箇所(下線)	評価 (無色:児童側評価、 有色:指導者側評価)	
					1回目	2回目
6年	3.クリーン大作戦 ①そうじの仕事を見直そう	・生活をつくり返り、生活時間を見直そう。	A②家庭生活と仕事について、次の事項を指導する。 イ 生活時間の有効な使い方を工夫し、家族に協力すること。	一回目 模擬授業の指導内容 (指導要領の内容と異なる箇所(下線))	二回目 模擬授業の指導内容	
			児童の生活時間に焦点を当て、自分の生活時間をどう使うか、自分で工夫してきめることができるようにする。また家庭での時間の使い方を考え実行し、見直すことができるようにする。	一回目 模擬授業の指導内容 (指導要領の内容と異なる箇所(下線))	二回目 模擬授業の指導内容	
			C②快適な住まい方について次の事項を指導する。 イ 住まい方に関心をもつて、整理・整頓や掃除の仕方が分かる工夫ができること。	一回目 模擬授業の指導内容 (指導要領の内容と異なる箇所(下線))	二回目 模擬授業の指導内容	
6年	3.クリーン大作戦 ①そうじの仕事を見直そう	・生活をつくり返り、生活時間を見直そう。	児童の生活時間に焦点を当て、自分の生活時間をどう使うか、自分で工夫してきめることができるようにする。また家庭での時間の使い方を考え実行し、見直すことができるようにする。 C②快適な住まい方について次の事項を指導する。 イ 住まい方に関心をもつて、整理・整頓や掃除の仕方が分かる工夫ができること。	一回目 模擬授業の指導内容 (指導要領の内容と異なる箇所(下線))	二回目 模擬授業の指導内容	
6年	6.くふうしよう おいしい食事 ①パランスのよい献立を考えよう	・栄養パランスを中心とした1食分のこんだてを考えよう。	B②栄養を考えたい食事について次の事項を指導する。 ウ 1日分の献立を考えること。	一回目 模擬授業の指導内容 (指導要領の内容と異なる箇所(下線))	二回目 模擬授業の指導内容	

指導側評価及び教員側評価は5点満点とした。

1) わたしたちの家庭科5・6 開隆堂 平成27年2月発行

で実施した。③指導要領家庭の意図する指導内容とは異なる内容で実施した。④大学生対象の内容と進度で、小学生向きとは言えなかった。以上の分類から、特に一回目授業では指導要領家庭の内容を十分に把握していない状態で授業を実施した実態がみられた。つまり、指導要領家庭の内容を適確に把握しておらず、その状態で本時目標を設定し、指導内容を考えていた可能性が考えられる。この状態が指導案作成時の困難点「何をどのように教えたらいいかわからない」の回答に結びついたと考えられる。本時目標自体の設定がしっかりしていないため、指導内容が本時目標と一致していない矛盾が散見された。

この一回目の授業の児童側評価はほぼ「4」付近の結果に対し、指導者側評価は「1」から「2」となり、両者の評価は乖離した。しかしながらこの乖離は二回目の授業で若干解決される傾向がみられた。一回目の授業後に指導者が、「本時指導内容は、指導要領家庭のどのあたりに記述があるのか」「指導要領家庭の内容のどこまでが一時間の内容として適しているのか」「指導内容や授業方法は適切か」「児童の発達段階に即しているのか」などの授業内容に踏み込んだ解説をした。その結果、その指導内容を意識し二回目授業で再構成したと考えられる。

二回目の授業後、多数の班で指導内容が指導要領の求める内容にほぼ近いもの変化した。しかしながら、未だ指導内容が指導要領家庭と乖離した授業も見受けられた。一例は、1食分の献立（朝食）を立てる単元であった。献立構成（主食、おかず（主菜、副菜）、汁）を説明し、この組み合わせが栄養バランスが良いためこの手法を使用することを理解させた後、実際の献立作成を行う授業構成となるのが一般的な授業である。しかし実際の授業では、献立構成を極めて簡単に教師（模擬授業担当者）が説明後、教師提示の料理（主食に該当する料理がほとんど）で児童が自分好みの献立を立て、その後教科書の献立例を参考にして児童が献立を作成する授業構成であった。一回目の教師提示の料理を使った食べたい料理での献立作成では、児童はスパゲティーにサンドイッチ、スパゲティーにカレーなどの主食中心の献立作成を行った。この不適切としか言えない献立への教師役からの指導（なぜ献立として適切ではないのかの説明）はなかった。さらに、その後の児童活動である教科書の献立例を使用しての献立作成においても、献立例（教科書表）の見方や、主食、主菜、副菜それぞれに適した料理の説明もなく、いきなり献立作成の活動に移ってしまったため、献立作成に戸惑い献立をうまく立てられない児童も多数みられた。この授業実施班は、教材研究が十分でなかったことによる授業構成の不十分さが授業実践力の低さの理由として挙げられる。

4. 模擬授業における児童側評価と指導者側評価との評点比較

一回目と二回目授業の授業評価の評点推移を図1に示した。その際、指導者側評価と児童側評価との評点との比較から三パターンにその傾向が分類された。つまり、一回目に比較し二回目の指導者側評価が、Ⅰ上昇型（二班が該当）、Ⅱ高値コンスタント型（一班が該当）、Ⅲ低値型（四班が該当）である。Ⅰ上昇型は、⑧⑨⑩項目の評点に着目すると、一回目に対

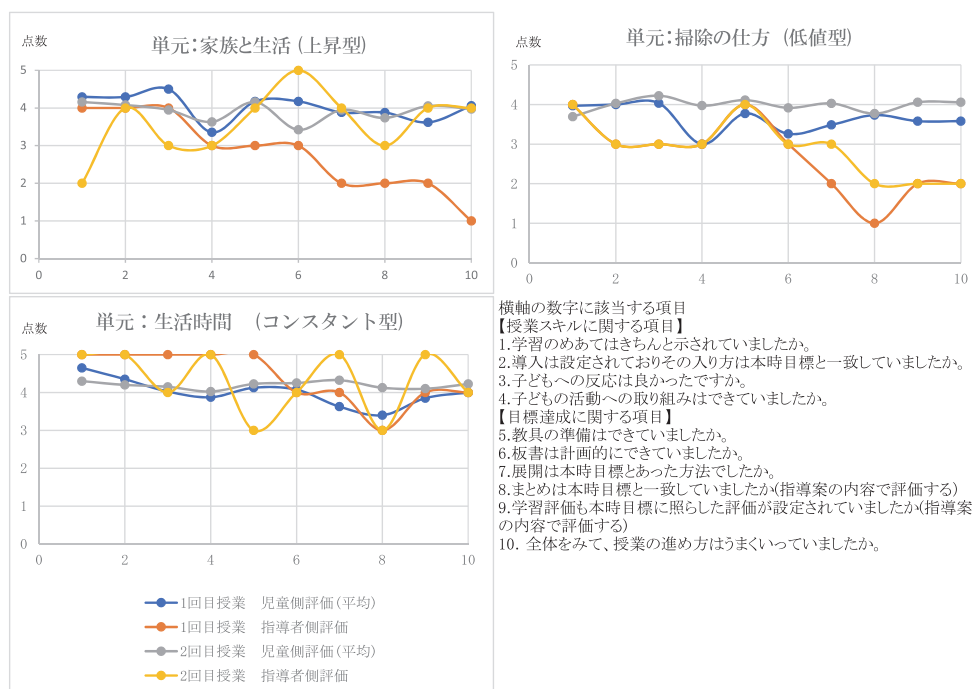


図1 模擬授業評価表の児童側評価と教員側評価の評点比較

して二回目の指導者側評価が高傾向を示した。つまり①の評価は低かったものの、概ね授業展開がうまく、授業が順調に運んだ類型である。逆にⅢ型は、⑧⑨⑩項目の二回目の指導者側評価の評点がすべて「2」を示した低評価パターンである。つまり、この類型は、①や⑤は高評点であるものの、どちらかという、授業構成が十分に練られておらず、授業が順調に運ばなかったパターンといえる。言い換えると、この類型は指導要領家庭の求める指導内容にまで授業を構成できなかった類型といえる。

この評点パターンの結果を踏まえて、特に⑧から⑩の評点が高いⅠ及びⅡ型を、授業実践力がある程度獲得された類型と見なした。対して、⑧から⑩の評点が低いⅢ型を授業実践力の獲得が低い類型と見なした。Ⅰ型やⅡ型に該当する班数は少なく、Ⅲ型（低値型）が約半数を占めた。以上の結果から、半数以上の班で授業実践力は二度の授業でも一様に獲得されたわけではなかった結果が示唆された。

一方憂慮すべき点は、ⅠからⅢの全型の評点推移の共通点として児童側評価のすべての評点がほぼ「4」前後である点であり、さらにⅠからⅢ型の評点推移が類似傾向を示している点である。その中でも特に、⑤から⑩の「目標達成」項目の評点は指導者側では変動があるものの、児童側評価ではほぼ一定値を示している点である。

この両者の評点差が顕著な箇所が数箇所で見られた結果から、指導者と児童役が授業を見る視点が異なり、児童役が授業実践を分析する能力（授業分析力）を獲得していない可能性が考えられた。班数が多く省察の時間が限られ、授業スキルだけでなく、「目標達成」項目

の授業内容の改善に向けての省察、あるいは指導者側からの指導内容改善の指摘の時間が十分に持たれた訳ではなかったことがその理由としてある。今後は授業を見る視点を授業の時間軸に沿って提示し、それをチェックして改善するシステムの導入と同時に、授業参観時に児童活動や指導状況についてメモをとり、そのメモから今後の授業に向けての課題を見つけ、授業方針に結び付くような評価システムの導入が必要と考える。

授業評価に関して貴志（2010）は、他者の授業のよさや課題を見取り、改善点を提示する活動が必要と述べ、さらにこの授業分析活動により授業の理解を深めることも授業力向上に寄与すると指摘している。今回の授業分析の実施結果を授業実施者にその場で提示された課題とともに伝達し協議する方式も、授業実践力獲得には不可欠な条件と考えられる。

5. まとめと今後の課題

二度の模擬授業が授業実践力に及ぼす影響について本研究では検討した。前報（畦, 2017）で、一度の模擬授業では授業実践力の獲得が十分ではなく、二度の授業実践でその力が獲得される可能性を示唆した。今回の二度の授業実践により、授業実践力の獲得に多少の優劣が認められた。つまり言い換えると、授業実践力は一様に獲得された訳ではない結果となった。この結果は、貴志（2010）の報告と一致する。

評価に着目すると、児童側評価において全評価項目に高評点を付ける傾向があった。特に授業スキル（声の大きさ、児童対応など）が高評点の場合は、総合評価でも高評点の傾向がみられ、適切な評価を促す何らかの手立てが必要と考えられた。つまり、今回の模擬授業の実践手法では、授業分析力の獲得には至らなかったといえる。しかしながら、多面的な評価視点を提示した授業評価表から、授業分析の多様な視点を身に付け、対象が成長した可能性は認められた。

授業分析力を獲得させるための解決策としては、省察時間を増やし、授業構成の要素である指導内容や学習過程、児童の活動内容などの協議を行う。つまり、他者の視点を授業に導入することで、授業内容をより深く理解する試みや、その過程で得られた課題を解決する方法を、共通の視点を持ち協議する時間を持つことが必要と考える。貴志（2010）は、評価表の記述に、何らかの課題をもたせるような指示が必要とも述べている。省察の時間にその課題をピックアップして協議を深め、相互に授業内容を深めていく手段も考えられる。

また本調査では、対象から省察の時間に、今以上の指導者の積極的な授業構成やその内容へのアドバイスを求める意見もみられた。授業構成の検討は、省察時間が設定された授業後のみならず、授業前に指導者が指導案をチェックするなどの指導充実も検討課題となる。授業の立案過程の充実が、授業構成力を獲得する一助となることは明らかである。

授業構成自体が十分でない点について高木（2007）は、授業の目標設定があいまいだと、授業が流れなくなると指摘している。本時目標と授業内容が一致していない班がみられたことから、指導者側でいくつかのパターンで目標を設定して模擬授業を行う方法も考えられる

が、この件は今後の検討課題である。

次の問題点は班員の参加度に公平性が担保できなかった点である。模擬授業担当者の主体性を保証しながら、全員参加で経時的にその質を向上させる仕組みの構築をどのような手法で行うのかも課題である。授業実践力向上は、班活動である場合は班の成長のプロセスでもある。十分な班員の能力発揮のためには、個々の教材研究による専門的知識の獲得と、個々の役割の遂行を支持する班内のバックアップ体制の構築、たとえば、リーダーと構成員の相互作用による力量形成、主体的行動から誘導される関係性の構築なども必須要件となる。個の単位ではなく、班という共同体で取り組むべき課題を解決するという認識を育成し、協働の体制・雰囲気作りの醸成が必要となる。その際、リーダーの担うべき役割を明確化にし、班員相互の刺激によりレベルアップを図る仕組み作りの必要性も出てくる。

以上の結果から、模擬授業において授業実践力を向上させる方策として、事前の指導者と模擬授業担当者との意見交換、指導案のチェックなどの模擬授業前の取り組みの導入、模擬授業後は授業方策やその課題についての協議を導入した十分な省察時間とその内容の充実などの教育活動充実の取り組みを導入するプログラムが今後必要となると考えられる。

引用文献

- 青木幸子 (2013), 模擬授業による教育実践力の育成と可能性, 東京家政大学博物館紀要, 18, 27-37
- 畦五月 (2017), 初等家庭科教育法における模擬授業での相互評価からみた授業実践力について, 就実論叢, 221-232
- 貴志倫子 (2010), 小学校家庭科の授業力向上をめざす模擬授業の実践, 学生の相互評価からみた授業分析力の検討, 教育実践研究 (福岡教育大学), 18, 85-90
- 高木幸子 (2007), 目標の提示による家庭科授業に対する評価内容の変容, 新潟大学教育人間科学部紀要, 10 (1), 49-56
- 藤沢伸介 (1995), 教育実習生の教授構想の問題点にあらわれた初心者としての教師の特徴, 跡見学園女子大学紀要, 28, 93-109
- 堀内かおる (2008), 家庭科教員養成における模擬授業の有効性, 日本家庭科教育学会誌, 51 (3), 169-179
- 文部科学省 (2006), 中央教育審議会答申「今後の教員養成・免許更新の在り方」
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1212707.htm (2017.7.2
ダウンロード)
- 文部科学省 (2008), 小学校指導案解説家庭編, 東京書籍, p3, p60
- 宮里智恵, 田崎慎治 (2015), 教職志望学生の自己教育力に関する研究—家庭科模擬授業への「リフレクション」導入の試み—, くらしき作陽大学・作陽音楽短期大学研究紀要, 48 (2), 15-31